平成１４年６月１日発行

かまだし

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

第4号

わがまちの顔

荏原流れ太鼓　ひびき会

夏、街では盆踊りの太鼓の音が響きわたる。やぐらの上では、全身を使って叩き手が和太鼓で節を刻む。私たちの住む蒲田西地区では青年たち、時に小・中学生が叩いている姿を目にする。

昭和五十三年から始まった「荏原流れ太鼓ひびき会」の活動は今年で二十五年。現在、会員は約六十人。小学四年生から六十代の方まで年齢層は広い。毎週火曜日、区内のスタジオに集まり練習している。

盆踊りの盆太鼓という地域に根ざした活動は、区の行事をはじめ年間で五十回を超える出演がある。ドイツやイギリスなど海外での演奏も経験し、この先も数多く招待の声がかかっているという。

太鼓を叩く時、立つ姿勢から、バチの持ち方・バチの重心、叩く位置や強弱などの技術的なことにはじまり、どうやって太鼓に音を伝えるか、どのような音を奏でたいのか、というところにまで行き着く。

太鼓の前での個人としての表現力は、時に「思った音が出せない」壁にぶつかる。まるでそれは譜面どおりにいかない私たちの人生を象徴しているようだ。

子どもたちが太鼓に惹かれ、会の中に数多く在籍する理由は何だろう。恐らくテクニックだけに執着することなく、「叩きたいから集まって来る」子どもたちに、同じ目線で会長の湯澤元一氏が楽しく和やかに指導しているからであろう。

太鼓の音を譜面に起こしたことがあるそうだ。しかし、それを見ながら叩いたところ、いつもの調子が出なかった。あくまで暗譜が基本である。太鼓を叩いた瞬間の自分に返ってくる響きの快感が、胎児が感じる母の鼓動に似ているのだろうか。譜面という一つの型にはめることが出来ないことも太鼓の魅力の一つであろう。

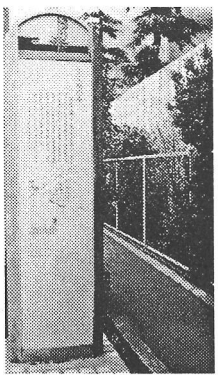
会長の湯澤元一氏はこれからのことについて、「この蒲田の地域で太鼓の良さをわかってくれる人を増やしたい。また、自分の子どもたち、そしてその先の世代のために基盤づくりをしていきたい」と語った。世界の音楽の中で、「和太鼓」というジャンルは、まだ広く知られていない。この先、世界的にも日本の伝統「和太鼓」が認知されるようになるまで「荏原流れ太鼓・ひびき会」が担う使命は大きい。

夏から始まる盆踊りの季節。遠くから聞こえてくる太鼓の音に耳を傾け、会場まで思い切って足を運んでみてはいかがですか。

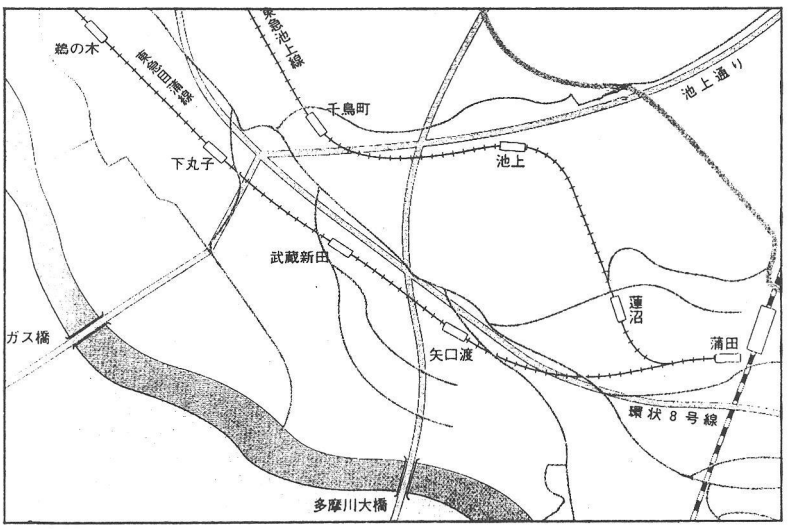
太鼓の響きに気を込めて

Promenade Of Rokugo Irrigation Ditch

六郷用水物語



蛸の手の跡
（新蒲田一丁目）



蒲田西地区周辺の
六郷用水流路跡

二度のご奉公

上の地図をご覧になればわかるように、六郷用水は蒲田西地区を西北から東南にかけて斜めに横断しています。蒲田駅方向に向かって東急多摩川線に、あるいは環状八号に沿うように流れていたことがわかります。

江戸時代に開削された六郷用水が、昭和になってから敷設された多摩川線や環状八号に沿った訳ではなく、六郷用水に沿って両者が敷設されたことは明らかです。多摩川線にしても、環状八号にしても、偶然に至近距離を並行に走っているわけではありません。当時、六郷用水脇の道路や土揚げ敷が両者の建設の際に、工事用資材の運搬道路として重要な役目を果たしていたのです。遠く江戸時代より灌漑用水、生活用水として大切な役目を担ってきた六郷用水が、農地の宅地への変貌に併せて、二度目のご奉公を果たしていたわけです。

大昔の多摩川は、大雨が降るたびにその流れを変え流域の田畑を流すという荒々しい川で、この流域一帯は東京湾に注ぐ三角州であり、肥沃な土壌でした。天正十八年（1590）関東に入国した徳川家康は、急増する人口対策として、関東平野の開発を目的に河川の改修工事を行います。この事業の一つとして治水と新田開発のために多摩川の水を狛江から取り入れ、六郷領まで引き込む六郷用水開削の計画がたてられたのです。

六郷用水開削工事

慶長二年（1597）川崎の代官、小泉次太夫は家康の命により安方村名主の藏方兵庫宅に六郷領内の全ての名主を集めました。そして工事の説明と協力要請を行い、直ちに測量が始まりました。

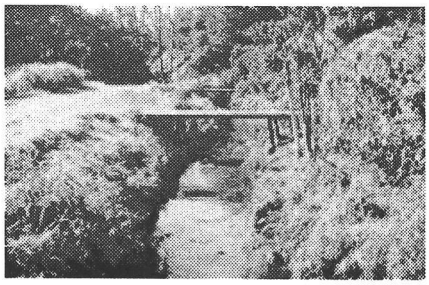
時を同じくして、対岸の川崎側でも二ヶ領用水の開削のための測量が始まりました。

用水工事は微妙な勾配をつける必要があり、測量は夜、提灯を灯して木に登り、その明かりを使って高低差や方位を測ったと言われています。こうして、上流に向け測量、杭打ちを進め、約二年かけて測量が終りました。

開削工事は測量と同様に下流から上流に向かって進められ、六郷側、川崎側とほぼ三ヶ月ご

とに交代して工事は進められました。これは従事する農民たちの疲弊を防ぎ、また自分たちの本業である農業も疎かにしないようにとの次太夫の配慮でした。現代のように機械など全く無い江戸時代、掘削はひたすら人力で行われ、鍬や鋤で土を掘りモッコに入れて運び出すという作業で、農民の手によって行なわれました。

最も難工事であった場所は、嶺町から鵜の木に入る所、観蔵院前付近の堀割で、その山は土が固くなかなか掘り進むことができず、人夫の苛立ちが目立つようになりました。そこで、女手も用いることで雰囲気を和らげることができたと伝えられ、嶺町には女堀の地名が伝えられています。



昭和23年頃の六郷用水
鵜の木一丁目付近

六郷用水の開削工事は十四年余りをかけ、慶長十六年（1611）に完了しました。多摩郡和泉村（現在の狛江市和泉）の多摩川から取水された用水は、世田谷領に入り、ほぼまっすぐに沼部に入り、矢口村の「南北引き分け」で北堀（池上、堤方、新井宿方面）と南堀（蒲田、六郷、糀谷方面）に分かれました。さらに各村には六郷用水から分かれた小堀が張り巡らされ、総延長は約三十キロにも及びました。六郷領と世田谷領の一部を合わせた五十ヶ村が用水の恩恵に恵まれ、以後三百年余、なくてはならない用水として利用されてきたのです。

区内の六郷用水を偲ぶ

大田区では、旧六郷用水コース整備計画に基づき、清流の復活、緑道の整備、案内標識の整備というように、場所と環境により三通りの方法で整備を行なってきました。

多摩川駅前にある浅間神社下から下流は完全に暗渠化されていますが、中原街道をくぐりぬけた所には、鯉が泳ぎ、水鳥が遊ぶ復元水路の遊歩道になっています。

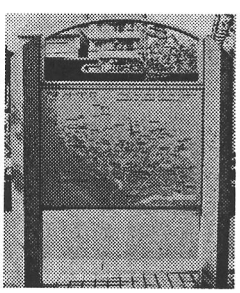
新幹線の架道橋から先は緑道のある道路になっています。ところが、西嶺町の観蔵院の南側では、坂を上ってまた下る道路になっています。かつて、ここの用水は掘り下げた深い谷の底を流れていたそうです。

千鳥三丁目には「南北引き分け」と言われた所があり、ここから北堀と南堀に分かれます。北堀は、東に向かって千鳥町駅北側の踏み切りを越えます。久が原六丁目には小さな水路が作られています。第二京浜を越すと案内標識のところどころ建つ緑道が呑川まで続きます。

北堀は本門寺近くの養源寺付近で呑川と交差していたといわれ、少し手前に「八寸」と呼ばれていた場所があります。八寸の角材で堰を作り、水流を呑川と女塚方面に振り分け、呑川に流れ込んだ用水は、呑川に設けられた堰で水位を上げ、再び新井宿方面へと流れていました。

池上通りの北側、通称旧道沿いを流れる北堀は、春日橋付近で池上通りを横断。入新井方面へ流れていたようです。

さて、蒲田西地区を流れていた南堀は、「南北引き分け」から南東に流れ、環状八号に沿ってところどころに案内標識を見ながら第二京浜を越えます。ここからは植え込みはなくなり一般道路となりますが、矢口の渡し駅の北側からの分水路が南に向かい多摩川線を越え、碁盤の目のような道路を斜めに横断しながら、六郷方面まで延びていました。ここはかつて、千間堀と呼ばれていたところです。



区の設置した
六郷用水案内標識

新蒲田二丁目8番地先の環状八号脇に案内標識があり、ここが蒲田駅方面へと向かう、かつての「御園堀」の分岐点。南堀は再び環状八号を斜めに横断し、現在の新蒲田へ。新蒲田一丁目19番地先の植込みには、「六郷用水物語～蛸の手」の案内標識があります。それこそ蛸の手のようにいく筋もの小堀となって分岐していたものと思われます。ここが、南堀本流の終着点。この先は蒲田電車区の構内。残念ながら往時の面影を偲ぶことはできません。

（取材　滝口　宮下　都築）

町内の主な施設と先輩達

西蒲田四丁目町会長　小谷野　正義

私たちの町会は、昭和二十二年以前には山野（さんや）町と呼ばれていたそうです。現在も、呑川に架かる山野橋としてその名が残っています。その後は日赤奉仕団として、現在の西蒲田一丁目と四丁目は同じ区画内だったそうです。

昭和二十八年、区の要望により、女塚二丁目として新しく発足しました。以来今日まで蒲田防犯協会、防火協会、蒲田交通安全協会等に積極的に加入し協力してまいりました。特に大城通りにあった交番を、太平橋公園の一角に誘致しました。今では、太平橋交番として町の安全のために大いに役立っています。

昭和四十二年に住居表示変更により、西蒲田四丁目町会となり、今日に至っております。その範囲は、東西はＪＲの線路から呑川の太平橋を渡って大城通りまで。同じくＪＲの線路から呑川の馬引橋を渡って大城通りまで。北側は、西蒲田一丁目町会、南側は女塚町会に隣接しています。

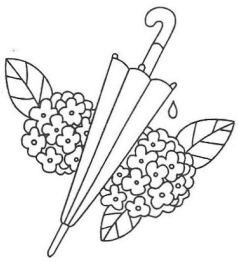
以前は古いアパートも多く雑然とした町並みでしたが、今はきれいに建て変わり、二割ほどの商店と新しいマンションができて、二〇〇〇世帯を超える住宅地に生まれ変わっています。

また、光明幼稚園、女塚保育園、蒲田音楽学園保育園があり、区の施設としては蒲田生活支援交流センター、シルバー人材センター分室があります。

では、これまでに明るいまちづくりに貢献してくださった先輩の町会長を紹介します。

初代　来生氏。二代　山中氏。三代　青木氏。四代　岩崎氏。五代　小泉氏。六代　木村氏です。

本当にありがとうございました。これからも、町会役員一同一体となって、明るい良いまちづくりにがんばっていきます。



事務局からのお知らせ

新所長の長谷です

この四月から、蒲田西特別出張所長に着任しました長谷（ながたに）と申します。

区民の方と出張所は共に理解と愛情を持ち、力を合わせてこの蒲田西の地域をわがまちと真に誇れるものにしたい。出張所は地域の自治活動の核になるものと考えています

なお、私の異動と同時に地域情報紙の担当が替わりました。長山と申します。共々宜しくお願い申し上げます。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，672人
	女	27，294人
	計	56，966人
世帯		28，738世帯

平成14年5月1日現在

編集後記

今回のわがまちの顔は、かまにし17創刊以来初めて団体を取り上げてみました。和太鼓の音には、体が自然と動いてしまうリズム感があります。この蒲田西の地域に根ざした活動を行なっていこうとしている「荏原流れ太鼓・ひびき会」。これからもその活動を見守っていきたいものだと思います。

また特集では、今後多摩川を取り上げていきます。今号では、その第一弾として、伝統ある六郷用水を特集しました。取材をしてみると、あらためて今は消えてしまった六郷用水の歴史の深さ、この地域にかつて住んでいた人々の生活との関わりの深さを感じました。

なお、かまにし17では、六郷用水跡地を歩いてみたいという皆様のために、今後散策ガイドをお送りする予定です。

情報紙に対するご意見・ご感想などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
三七三二―四七八五